A Japanese translation of Wyndham Lewis's *Anglosaxony: A League that works* (3)

MAEDA Shigeru

Following to my contribution to the last number of this bulletin, I continue to translate the last part of Wyndham Lewis's 1941 pamphlet titled 'Anglosaxony' into Japanese. In the previous part, we saw that ***Stiltheorie*** of Wilhelm Worringer had a great influence on Lewis's thought especially through its chronological reinterpretation by T. E. Hulme.

In the last part of ***Anglosaxony***, Lewis developed this ***Stilthorie*** by combining it with geopolitics of Alfred Thyer Mahan (1880-1914), or rather Sir Halford John Mackinder (1861-1947). In this development, Lewis reciprocally identified Teuton 'land-power' to Classical and representative ***Weltanschauung*** and Anglosaxon 'sea-power' to Oriental and abstract ***Weltanschauung*** by saying '[t]he great deserts… and the great oceans dotted with our merchant navies, are productive of a mentality that is not so very different.'

Owing to its character, Lewis argued, Anglo-saxony could bear 'something abstract and international, something universal,' while remarking that '[t]he Anglo-saxon is a bad social snob: his snobbery is the great blot upon his democracy.' In Lewis's prospect, WW2 would result in eliminating the ***rentier*** in England and this snobbery and in turning the earth into a democratic and universalist 'big village.'

研究ノート

ウィンダム・ルイス
『Anglosaxony：A League that Works』翻訳（３）

前　田　　　茂　MAEDA Shigeru

前々号、前号に引き続き、ウィンダム・ルイスの『アングロサクソン気質』の翻訳を投稿させていただく。３年がかりになってしまったが、この小冊子の翻訳は今回で終了である。

前号の訳文に先立つ紹介文では、ルイスの錯綜した考え方にはＴ・Ｅ・ヒュームを介してヴィルヘルム・ヴォリンガーの様式論からの影響が見て取れることを指摘した。今回訳出した部分でも、その影響は見て取れる。注目すべき展開としては、この様式論が――1920年代半ばのルイスの政治的転回のもとで――当時の地政学と結びついたことが挙げられる。実際、地理的な条件によって人々の「芸術意欲」とそれが生み出す様式に根本的な違いが認められるとするヴォリンガーの様式論は、地域の地理的条件を考慮しつつ国際政治を読み解こうとする地政学と同じ発想を共有している。そこからルイスが「大洋と大地」という二項対立を持ち出して第二次世界大戦を解釈しようとしたことは自然な成り行きであったろう。ヴォリンガーの『抽象と感情移入』が公刊されたのは1908年であり、この著作に感銘を受けたヒュームがロンドンでルイスと接点を持ったのが遅くとも1912年だというのは前回の投稿で紹介したとおりであるが、一方で地政学について言えば、アルフレッド・セイヤー・マハンの『海上権力史論』が公刊されたのは1890年、そしてルイスのこの小冊子の関心にも近いハルフォード・マッキンダーの『デモクラシーの理想と現実』が公刊されたのは1919年のことであった(1)。マッキンダーの次の説明は、そのまま『アングロサクソン気質』の文章にも見える――「ここで我々が関心を向けてきたのは、シーパワーの基礎とそのランドパワーの基礎との関係についてであった」、「普段、ロンドンならびにニューヨークで国際政治が議論される仕方は、欧州大陸のカフェでそれが議論される仕方とは異なっている」(2)。

このマッキンダーの言葉にあるように、重要なのは著名な戦略家の展望ではなく、カフェで国際政治について議論する人々の平均的な観点である。言うまでもなく様式論もまた「人名なき美術史」と呼ばれて、芸術の天才よりも平均的な表現に着目した。ルイスもまた、平均的な人間に着目し、次のように述べる――「生得的には、私はおそらくこれまで私が話してきた理論家たちの一人なのだ。しかし私は経験から以下のことを学んだ。すなわち、共同体、種族、国家は樹木のように成長する。その過去はその現在と同じくらい現実的であり、しばしば現在よりもはるかに現実的である。場当たり的に根本的な変化をそれに課すことは不可能である」(3)。つまり、ここで蔑称となっている「理論家」でもない平民出身のヒトラーをして「現代ドイツの成年男子の表現」だと結論づけた1931年の『ヒトラー』執筆時のルイスの基本的な観点は(4)、『アングロサクソン気質』でもそのまま引き継がれている。

では、ナチズムあるいはファシズムの何が問題であり、なぜアングロサクソン気質は特権的に優れているとされ、そしてルイスにとって第二次世界大戦とはどのような意味を持っていたのか。ルイスはこの小冊子冒頭部分で、ファシズムと共産主義が人工的な産物なのに対して、民主主義が平均的なアングロ・サクソン人によって共有される民族気質であるとし、その特質として思想と言論の自由を挙げている。しかし「言論の自由」は本来、個別の言論の内容に関わらず全ての言論の自由を保障するという点で、カントの定言命法と同じくらい抽象的なルールである。ただし、その抽象的なルールにも唯一の例外がある。それは「言論の自由を保障するためは、言論の自由を否定する言論だけは絶対に許容してはならない」である。もし、これを許容してしまい、そしてそれが多数派を占めてしまえば、ファシズム

の言論統制が完成する。そしてこのルール構成が言論の個別の内容に無頓着だということは、政治的には右派であれ左派であれ、この抽象的なルールを遵守しない者はファシズムに賛同する可能性を内包していることになる。すなわち､そのルール違反者は、「そのトレードマークが鉤十字であれハンマーと鎌であれ……平和という大義を毛嫌い」する(5)。ルイスにとって、第二次世界大戦とは、言論の自由を掲げる民主主義と、この言論の自由のただなかから生まれる「言論の自由を否定しようとする言論」との戦いであり、さらにアングロサクソン流の民主主義が長く保持してきた不自由な制度、すなわち階級制度が最終的に機能しなくなる機会であった。

以上のように考えるなら、ルイスの思想とその一貫性が理解できる。ルイスがアングロサクソン人の故郷として掲げる「大いなる抽象的な大洋」は(6)、ヴォリンガーが高度な抽象衝動の生まれる場としたエジプトの砂漠と同等のものとして扱われている――「放浪民……が暮らす大砂漠と、我々の商用船が点在するような大洋とは、さほど違いのない精神性を生み出す」(7)。ヴォリンガーによれば､「東方の文化民族だけは、彼らのいっそう深い世界本能でもって合理主義的意味における発展に反対し……、全ての生命現象の計り知れない混沌を自覚し続けていた……。外界の現象がもつ混乱した連結と相互作用に悩まされた結果、これらの民族はとどまることを知らぬ安静への要求を持つに至った。彼らが芸術に求めた幸福感の可能性は、外界の事物に自己を沈潜させ、味わうということではなく［＝感情移入衝動］、外界の個物をその恣意性と外見上の偶然性から抽出し、これを抽象形式に近づけて永続化し、それにより現象の流動の中に静止点を見出すことであった」(8)。だとすれば、『アングロサクソン気質』第３章末尾でルイスが「神」を持ち出す理由も理解できる。これは唐突なキリスト教信仰への阿りではなく、抽象形式の極致への回帰を示唆しているのである――「なぜ総統の代わりにこの宇宙の壮大な建築家を戴こうとしないのか。神というのが十分には具体的でない――あまりに抽象的だからか」(9)。

ところでルイスが『アングロサクソン気質』で読み間違った第二次世界大戦後の趨勢は、エアパワーの興隆である。開戦前でも一週間近くかかっていた北大西洋航路は、1950年代にジェット旅客機が投入されたことによって十数時間で横断可能となった。もちろん、「大洋と大地」を対比させるルイスの発想を忠実に踏まえるなら、「大気」を住処とする人々が実在するようになることは現在でもＳＦの領域に属している。しかしルイスが夢想するように、アングロサクソン気質がグローバルに行き渡り、彼が「我々の寄り合い（gemots)」(10)と呼んでいるものを地球規模で実現するための物理的な条件は、19世紀を通じて発展した電信と海底ケーブル網も考え合わせるなら、第二次世界大戦後ほどなくして――1957年に逝去したルイスの存命中に――整ってしまったのである。ところで1943年の夏、当時カナダに疎開していたルイスのもとを、同じカナダ出身の若手研究者が訪問する。そして数ヶ月にわたって、ルイスの1949年の著作の主題、すなわち電話と航空機によって地球全体が「一つの大きな村（one big village)」になるという展望が議論された(11)。この若手研究者こそ当時32歳のマーシャル・マクルーハンであり、後に「地球規模の村（the global village)」という表現で有名となった。

(1) 本稿の執筆にあたって参照したのは――Wilhelm Worringer, *Abstraktion und Einfühlung*, München: R. Piper & Co., 1921; Halford Mackinder, *Democratic Ideals andReality*, London: Constable & Co., 1919.
(2) Mackinder, *op.cit.*, p.76, 94.
(3) Wyndham Lewis, *Anglosaxony : A League that Works*, Tronto: Rayerson Press, 1941, p.72.
(4) Lewis, *Hitler*, Chatto & Windus, 1931, p.201-2.
(5) *Anglosaxony*, p.71.
(6) *Ibid.*, p.52.
(7) *Ibid.*, p.59.
(8) Worringer, p.21（[ ] 内は筆者補足）.
(9) *Anglosaxony*, p.65. さらに、普遍主義的な民族気質の抽象的な造形表現が、ルイスの1919年の作品《攻撃された砲兵隊》と1936-7年の作品《ニューファンドランド島》とに共通していることを明らかにした以下の論攷を参照のこと――要真理子、「ウィンダム・ルイスの戦争画――波のイメージとエネルギー」、小野寺玲子責任編集、『ランドスケープとモダニティ』（イギリス美術叢書Ⅳ）、ありな書房、2019年。
(10)「gemot」とはアングロサクソン時代のイングランドで開かれた州や郡の立法・司法の集会のこと。
(11) 拙稿、「ウィンダム・ルイス『Anglosaxony：A League that Works』翻訳、京都精華大学紀要52号、161頁および註５を参照のこと。

第三部　シーパワーと普遍主義

第一章　領土vs波

民主主義とファシズムは、それぞれが武力外交における対応物を持っている。今日、それら二つは海と大地の間の戦いというかたちで対立し合っているのである。アングロサクソン人は海、あるいはむしろ大洋を代表しており、ファシストは大地を――ほとんど神秘的に大地を代表している。

国家社会主義のプロパガンダで「土」が主要な役割を果たしている、つまり「血と領土（Blut und Boden）」が彼らのモットーであるなら、おそらく「波」というのが我々のモットーであるべきだ。なぜなら大洋の波は弾力性と自由、そしてつかみどころのなさを備えており、ある意味では根っこを持たないからである。

農民根性の根を張った不動性、つまり堅苦しく、欲深く、寡黙な不動性に鋭く対立するものとして、我々は大海原を指し示すことができよう。そこでは何も育たず、一切が押し流され、波間の不安定な表面を千鳥足であちこちへと揺れ動くブイだけが最も安定していて、それは泥の中に錨を下ろしてはいても、そこに根を張っている訳ではない。

《農民》であるヒトラーに対抗して我々は《船乗り》を掲げて自らの象徴としよう――それは動物の不動性というナチスの象徴に対抗する動物の落ち着きのなさの象徴である。

我々はすでに他の問題について全体主義の著作から多くのページを取り上げてきたが、大いに宣伝されたヒトラーの《大地》に対抗して《大洋》という適切な象徴を掲げる英国の広報担当者や宣伝活動家が一人もいなかったというのは、むしろ驚くべきことである。

イギリス人は自分を宣伝することが不得意だ。それは彼らのこれ以上ないほどの美徳である。しかし過剰な気分高揚の時代にあっては、やはり宣伝についてもっと考えてみる方がよろしかろう。

しかしながら、おそらく我々は一般化する精神にいささか乏しい。我々は道学者ならあり余るほど擁している。我々にはマイクを通して大らかで朴訥な人柄を表明する虚心坦懐な不平家なら大勢集められるものの、それ以外が不足している。諸観念の戦争、「イデオロギー」の戦争においては、我々は筋肉よりもむしろ頭脳を動員せねばならない。筋肉でうまくいったのは［1850年半ばの］クリミア戦争までのことだ。

ところで我々の詩人たちはどこにいるのか？　過去の最も偉大な詩人たちの名によって飾られた歴史を持つ国家が、政治の領域における想像力には不信の目を向ける。詩人にふさわしい題材は花々、雲雀であり、夕日だというのだ。そういう訳で我々には想像力豊かな政治が欠けている。チャーチル氏はここ数年にわたって要職から外されているが、その理由は彼の演説があまりに「利口」だと見なされていて、彼の使う言葉があまりに頻繁に下院議員たちをして辞書を引かせているからである。

もし我々が自分たちの国家の有する精神的な富を以上のような方向に活用するすべを学んでいたなら、世界中が我々について遥かによい印象を抱いたことだろう。我々はもっと多くの同盟国を得ていたはずだ。全ての外国人はどういう訳か頭脳の方に感銘を受ける。つまり我々は彼らに対しては詩人たちを活用せねばならない。たとえ我々が苦難の時にあって、自分たちが使う分には、頑迷にブツクサ言いながら、ぶっきらぼう印のおしゃぶりの抹香臭い陳腐さの方をやはり好み続けるとしても。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

いずれにせよ、一度でも強力なプロパガンダ計画に着手しようと決断したのならば、「領土に抗して波を」以上に優れた言い回しは思いつかない。そこには国家社会主義の大地というナンセンスに対する我々の最良の応酬が疑いようもなく潜んでいる。そこに論争がある限り――そしてもちろんこれまでも良い論争、悪い論争、どちらでもない論争が数多くあった訳だが――大洋、大いなる抽象的な大洋は、この論争において我々に有利な手がかりである。

しかしこのテーマ、すなわち海水と地面の拮抗というテーマに関して、次章ではシーパワー（sea-power）について、ただし実際に現下の戦争がイデオロギー的な性格をもつがゆえにシーパワーに与えられる新たな意味にも言及しつつ、新しい視座から考察してみよう。

第二章　シーパワーについての新しい考え方

「海軍力（シーパワー）が常に勝者となるにちがいない」とマハン提督(1)は断言した。そしてこのたびの戦争では、これまでのところ、空軍力（エアパワー）が戦争の勝者として海軍力（シーパワー）にも匹敵するといったことは示されていない。

水か大気かどちらかを主要な戦力として選ばねば

ならないとすれば、水を味方につけるのに賭ける方がずっと安全であろう。事実、これまでのところ大気の方は（軍事的な文脈では）飛び道具に過ぎない。水の方は、戦争における要因としては、歩兵を排除してくれる。そして、どんな戦闘も銃撃だけでは決着がつかないように、（砲弾の代わりの）空爆だけでは目的を果たせない。

もちろん将来はどんな分量の水、すなわち大西洋であっても、航空隊にとって障害ではなくなるかもしれないが、ただし完全装備の陸上部隊が3000マイルを空路で移動し、大西洋と太平洋をものともしなくなるまでには、まだ長い時間がかかるだろう。今日、たかだか20マイルの幅しかない海峡、すなわちイギリス海峡ですら、ナポレオンにとってもそうだったようにヒトラーにとっても穏やかならぬ問題となっている。まだしばらくの間、英国艦隊はこの海峡を20マイル幅の墓場にし、かなりの数のドイツ人たちをそこに葬ることだろう。

もちろん諸々の秘密兵器は存在する。常に人間の創意工夫というものがあって、これを計算に入れておくべきである。とはいえフランス陥落以降、20マイルの水のおかげで戦況は――空爆は別にして――膠着状態に陥っている。海軍力（シーパワー）がなかったなら、今頃ヒトラー氏はロンドンに、さらにはボンベイ［＝ムンバイ］に入城していることだろう。

しかしながらシーパワーが意味しているのは単なる防衛上の障壁以上のことである。今日それは、私がこの章を始めるにあたって引用したアメリカの提督［マハン］が彼の有名な公理において理解していた以上のことを意味するようになった。第一に、二つの種類のシーパワーがある。そして我々の現在の敵は、我々のための「シーパワー」を定義し直してしまった。彼らはシーパワーを分割し、一方をアングロサクソン流の――つまりずる賢い海軍力（シーパワー）――とし、そして他方を別の類いの――当然ながら高潔な海軍力（シーパワー）――としたのである。

ドイツの広報担当者や宣伝屋の見るところ、アングロサクソン人は他の誰とも異なる仕方でシーパワーのことを考える。それは実に極めて忌々しい類いのシーパワーであり、いかにも飛び抜けてずる賢く自分勝手な種類の人々だけが自身の内面の意識からかつて進化させることのできたものである。かくしてドイツ人たちの主張によれば、現下の戦争においては、まさにこうした類いのシーパワーにとどめを刺すために全力を傾けねばならないとされる。

さて、読者の皆と私がシーパワーという言葉を用いるとき、我々全員が意味しているのは、それについてマハン提督がかくも快活に独断的であったように、古き良き人畜無害なものである。ゲッベルス博士がこの言葉を用いるとき、彼は何かはるかに邪悪なものを意味させている。そして衒学的なドイツ風の流儀で、彼とその取り巻きたちはそのための一つの長ったらしい言葉――すなわち「普遍主義（universalism）」を見つけ出した。彼らは陰鬱な様子で「アングロサクソン流の海上普遍主義」に言及する。この専門用語（ジャーゴン）が何を意味しているのかを理解してみるために、しばし時間を費やしてもよろしかろう。本小冊子のこの部分では、シーパワーに関するこの新しいドクトリンを詳しく検討し、その誤りを明らかにしたい。そしてそれによって、後に見るように、我々は民主主義を定義するという試みにとって重要な素材を物理的に用意することになる。なぜなら民主主義は、ヴィーナス／アフロディーテと同様に、海から生まれたというのが私の信ずるところだからである。私の考えでは、民主主義の最も完璧な表現は一人の船員である。というのも我々の祖先はつまるところ古代スカンジナビア人であり、彼らは大地に関係するものには気に留めることすらしてこなかった。ヒトラー主義者にとっての地面、ユダヤ人にとっての市場、それが我々にとっての大洋なのだ。

この新たなシーパワー・ドクトリンを論破することになるだろうと私は述べたが、それは自ずから誤りを明らかにするのだと述べた方がもっと正確だったろう。というのもナチスの定義が論理的であるかのように受け取ってしまうと、あらゆる島嶼国勢（island-power）は、大陸国勢（land-power）とは対照的に、悪辣なものになってしまうからだ。海洋国家は海に囲まれているため、その性質上、（ａ）軍艦を装備することによって、（ｂ）大陸からの干渉から安全な距離を取りつつ諸国から食料と原料を供給してもらえることによって、小狡く優位を保っていることになるらしい。しかしながら、この定義し直された「シーパワー」に関する主要な議論のいくつかを考察してみよう。

第一に、この戦争のありようは今や誰にとっても分かりやすくなっている。それは徐々に鯨と象の抗争のようなものへと変貌していった。最初に私が述べたように、海軍力は陸軍力に匹敵する。空軍力は、言ってみれば、どっちつかずのまま思い悩んでいる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

しかしまさに――最も広く解釈された限りでの――アングロサクソン的な秩序こそ、日本人によって構想された「東亜新秩序」や、あるいは枢軸国によって構想された「ヨーロッパにおける新秩序」が対抗すべく差し向けられているものである。その背景には、程度の差こそあれ新しく、程度の差こそあれ曖昧模糊とした他の諸々の「秩序」、日本と枢軸国の構想にある程度まで合致する秩序がある。

ヨーロッパの大陸国家はたいてい一緒になっており、それはアングロサクソン国家、つまり英語圏の国家がそうなっているのと同様である。この原則にもとづけば、イングランドとアイルランドは、二つを分かつ――残念ながら我々も知っているような――あらゆる事柄にもかかわらず、まったく同一であろう。

この「アングロサクソン」という項目による一般化のおかげで主張してもよかろう唯一の現実とは、アングロサクソン的な世界、あるいは英語話者たちの世界は島嶼的な世界だという事実である。大洋はこの世界の要素である。このことは、間違った知識を持つヨーロッパ人が思い込みがちなように、この世界が単一の政治単位として機能すると期待されてしかるべきといったことは意味していない。とはいえこのことはこの世界に何らかの同じ宿命を課す。

［イギリス国王］ジョージ六世の臣民にとってシーパワーが意味することは［アメリカ合衆国大統領］ルーズヴェルトの同胞にとってもほぼ同じである。双方ともシーパワーの維持に関心を抱いている。このことを以て双方が自然に同盟関係にあるということにはならない。もっと消極的に言えば、このことが意味しているのは、双方が実質的には一種の《自分は自分、他人は他人》という協定関係にあるということである。さらにそれに続くのは、もしシーパワーに対する嫌悪を理論的に喧伝するような間抜けが現れたなら、これらシーパワー国家群はいくぶんかまとまりがちだということであって、それはちょうど戦前の国際連盟の会議において、誰かが陸軍兵力は名目部隊のみに制限されるべきだとか戦車は廃絶されるべきだとか提案した場合には、強大なランドパワー国家群の投票先が同じになりがちだったのと同様である。

かくしてドイツの武力外交の観点からすると、アングロサクソン人は七つの海を支配する人々ということになる。アメリカは、ほとんどイングランドと同程度に、一つの島嶼である。オーストラリアもまた別の巨大な島嶼である。植民地時代のアメリカは、農民たちの国になる以前は船乗りたちの国であった。そして今日、合衆国は大英帝国と「海上覇権」と呼ばれているものを共有している。世界で最も強大な二つの海軍とは英国とアメリカのそれであり、ともに自らの快不快を表明するためにシーパワーを利用する傾向を等しく持っている。そしてイングランドも合衆国も、開戦当初は、その名に値する陸軍を保有していなかった。

これら二つの強大な勢力はともに海軍基準で、あるいは陸海両軍の基準で思考する。二つともローマ軍よりはむしろカルタゴ軍に似ている。それがゆえに、ドイツの政治家の心中において、これらは考慮の対象外となる。現下の戦争においてアメリカ合衆国は建前上は一発も発砲することはなかろうとドイツ人たちは完璧によく理解している。にもかかわらず、彼らドイツ人たちはシーパワーに対する、とりわけアングロサクソン型のシーパワーに対する軍事行動がアメリカ人たちを喜ばせるようには計画されていないことも知っている。そしてアメリカ人たちが（私個人はそうせねばならないと信じているが）最終的に参戦しようと、あるいはすまいとに関わらず、彼らはドイツの敵になることだろう。

さて、アングロサクソン型のシーパワーというものが何を意味するのかについて、少しばかり例証を提供して、こうした区別がいかなる性質のものかを明瞭にしてみよう。

ほぼイングランドないしアメリカにも匹敵するほどの驚くべき威力を備えた艦隊を保有する日本人を見てみよう。このドイツ流のシーパワー解釈によれば、理論上はシーパワーそのものが罵倒されているにもかかわらず、なぜ日本人は［イングランドないしアメリカと］同じくらい不快に思うはずなのにそうでないのか。そこにはちょっとした理由がある。以下に説明しよう。

日本の艦隊は過剰なくらい強力だが、それは東アジア海域に特化してデザインされ建造されている。その艦隊は、本当に無敵ということはないにしても、中国近海では非常に物騒だと考えられてはいる。とはいえそれは英国とアメリカの艦隊のように普遍的な運用のためではなく、地域的な運用、ほとんど沿岸水域での運用のために建造されているのである。

言いかえれば日本人は、彼らが常にそうだったようなマレー海域の海賊のままなのであり、つまり本質的には有史以来自分たちが活動してきた水域より彼方を目指したりはしない船乗りなのである。工業時代の機械技術の進化を全て考慮しても、日本人の

軍艦はせいぜい巨大な戦闘用カヌーより以上くらいのものだ。イタリア人たちは《我らの海［地中海］》[2]の支配者となるくらいの野心しか持ち合わせていない。あるいは彼らが最近経験したこと[3]は、それ以前には彼らが持っていたこの野心さえ癒してしまったに違いない。

以上で我々の敵、ドイツの議論の大筋がどのようなものかが見て取れただろう。彼らの主張によれば、強大なアングロサクソンの艦隊の船乗りたちだけが言わば普遍的な船乗りなのであって、放浪者らしく距離と空虚な空間をものともせずに遥かアメリカ大陸にまで進んでいった――と信じる者もいる――ユダヤ人の航海士の流儀に従っているのである。

そうすると、この世界的な紛争はますます、そのあらゆる含みを伴ったシーパワーに抗しての聖戦の様相を帯びて見えてくる。あるいは次のように言った方がおそらくずっと真実であろう。すなわち、それはシーパワーに対する抽象的な攻撃というよりは、この［シーパワー流の］政治的統治の技術形式が有するあらゆる含みに抗してのもう一つの政治的統治の技術による具体的な挑戦なのである。

（この段階では、いったん立ち止まって、この攻撃が実際にはいかに偽善的かを指摘することはすまい。というのも、一つの国家もしくは国家群が証明しているように、シーパワーを制圧することに成功したならば、そのことによって海洋における強大な力を獲得するに違いないからだ。なぜなら海洋は、その時々に応じてこれを制する海軍に何が起ころうとも、そして程度の差こそあれ完全に空軍が海軍に取って代わる時までは、武力外交における潜在能力を全て備えながら同じままなのだから。）

アメリカはいずれその勢力が最大値に達した時点で、この並外れた現象、すなわち大英帝国を重要性の点で超越するよう運命づけられているかに見える。そして今日のアメリカ市民をどんな意味であれ古代ブリトン人の末裔だと考えるのは馬鹿げたことであろう。とはいえもちろん、アメリカへの最初の入植者たちが航海を生業とする家系であった――さもなくば彼らがインディアンを制圧して新国家を設立するのに十分な人数でアメリカに到達することなど決してなかっただろうから実際そうであったはずなのだ――という事実はなお重視されよう。

酷使され気味の「アングロサクソン」という言葉の重要性がどれほど大きかろうと、あるいはどれほど小さかろうと、この言葉のもとに分類される国家は、（その起源である言わば大洋的な性質によって条件づけられていることにより）必然的に、島国根性を持ち、他の人々から孤立している。そして彼らの島国根性と並んで見出されることになるのが、ナチスによってかくも強力に批判されているところの普遍主義的な態度である。

大英帝国は世界中に散らばった大きな群島だというのはよく言われてきたことだ。北アメリカは北極からパナマ運河に至るまで一つの巨大な島である。その言語と文化は均質であり、ヨーロッパとアジアから大洋によって切り離されている。その住人たちは、他の諸々の点ではいかに似ていないとしても、ちょうど難攻不落の堀割りである英国海峡のおかげでイギリス人が享受してきたのと正確に同じ絶対的な安心感を享受してきた。そしてこの伝統的な免責感覚はアメリカ人において、ヨーロッパで起こっていることに対する態度を、ヨーロッパ大陸での出来事に対するイギリス人の態度とほぼ同じようなものとして育んできたのである。

さて、このいわゆる「アングロサクソン」型のシーパワーが、それについてヨーロッパの政治家たちが議論し、現在ではそれを再定義しようとしているような武力問題としてだけではなく、どのようにして心理学的な問題としても理解されるのか、読者にも明らかになったことだろう。これはシーパワーを活用している人々の抽象的（abstract）な態度についての問題であり、人間の一般的かつ陸生的な共同体から抽出され（abstracted）たり排除された人々についての問題なのである。彼らは外側の虚空（つまり大洋と大小の差はあれその島々）に居住しており、生活と政治の問題全てに対してあまりに超然かつ高慢な、またあまりに非現実的もしくは非現実主義的な、仕方でアプローチする。

強大な典型的ランドパワーたるドイツが「アングロサクソン」と呼んで異議申し立てをするのは、シーパワーを普遍主義的に解釈したことによる。それは軍事的というよりはむしろ神秘的な何かなのである。いずれにせよそれは海軍力（シーパワー）という単なる軍事的な概念――ドイツ人の目には善良かつ率直な軍事的概念！――を超越しているのだ。

制限つきのシーパワーなら問題ない！　と激昂したユンカーたち[4]、あるいはそのナチスの同僚たちは主張する。なのに、どこであれ船が出せるならこの神秘的な海の支配力は行使されるべきだとするアングロサクソンの主張は何なのか？　彼らがバルト海にまで自分たちの権限を及ぼそうとするのはなぜなのか！　あたかも彼らは水の元素そのものを所有

しているかのようではないか！

大西洋に彼ら自身の「我らの海」を持つだけにとどまらず、彼ら（この狭量なアングロサクソン人ども！）は、地中海、黒海の入り口、日本海にも首を突っ込んでいる。彼らは遍在的だが、それは彼らが、言ってみれば、普遍的な船乗りだからだ。「我らの海」主義者のような、ただの帆船水夫、沿岸の帆掛け船乗りといった連中ではないのだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上がナチスの唱えている不平不満である。しかしこの理論には若干の伸びしろがあって、現在までのところ彼らはそのことを考えもしていない。このささやかな追加考察を彼らのために行なってやり、それがどんな結末に至るのか見てみよう。

海上移動といっても、大がかりなオーケストラ用に作曲された交響曲と室内楽が異なっているくらい互いに異なった二つの種類があることは、すでに当たり前のこととして認めてもらえよう。とはいえ大洋――あるいはアメリカとヨーロッパ、もしくはアメリカとアジアの間に広がっているサハラと言った方がよいだろうか――についてもう少し考えを巡らせてみよう。

放浪民（ラクダが彼らにとっての「砂漠用の船」であるような）が暮らす大砂漠と、我々の商用船が点在するような大洋とは、さほど違いのない精神性を生み出す。船乗りというのは一種の放浪民である。そして、その空間が水で充たされていようと砂で充たされていようと、空虚での習慣は、抽象的な価値の方を、もっと具体的で馴染みやすい価値よりも優先する傾向にある。

（アドルフ・ヒトラーがその不健全な典型であるような）内向きの農民根性からすれば、「アングロサクソン人」（イギリス人であれアメリカ人であれ）が、例えば狭い意味での人種といったものに無頓着なのは紛れもなく驚きの源である。しかしすぐれて海上移動的な国家（英国）は必然的に考え方が世界主義的である。そしてアメリカ人もまた、彼らのヨーロッパにおける出身地から、大洋的に、抽出されているので、必然的に世界主義的である。誰であれアメリカ人と人種について話しをしようとする者はすぐに自分が深い海の底にいると感じてしまう。

世界中を旅してまわる人間は、たとえ生まれ故郷の山間に多大な情感を抱いているとしても、波間にも緑の谷があることを知っている。そして後者の、ずっと抽象的な谷間は、肌が何色であろうと、またその人の聖典が雲間に座るヤハウェのことを啓示していようと、あるいは神聖で大事に扱われている牛のことを啓示していて、ヤハウェなど玉座から引き下ろされていようと、全ての人間にとって同じである。山間の住処に閉じこもっている内陸の農民が他所者に抱く嫌悪感など彼は持っていない。彼の肩はあらゆる色と血筋を持った外国人と触れ合っており、外国人についての迷信などとは無縁である。おそらく彼はあらゆる人間が外見の下ではほとんど同じなのをすでに知っている。

ヒトラー氏の言い立てる凶暴なナンセンスについて考察する際、我々がたいてい失念してしまうのは、第一次世界大戦での経験は別として――これを勘定に入れるのは無理筋である――、ヒトラー氏が最初にドイツの国境を越えて旅行したのは、彼がヴェネツィアまで自らの政治的盟友に面会に赴いたときのことだった、ということである。彼がかなり頻繁にそういうことをしだしたのは、ここ一年半のことだ。しかし『我が闘争』の頃のヒトラーは、自身の拠り所たる南ドイツとオーストリア以外については奇妙なほど全く無知であった。それこそが我々全員にとって最大の不幸だったのだ。

イギリス人の島国根性は否定しようのない事実である。しかし残念なことに陸に囲まれた人々の島国根性にはこれまでそれほど注意が向けられてこなかった。オーストリアのアルプスの周囲には人が自由に行き来するのを妨げる海はないとはいえ、オーストリアの農民には、まるでそこが海で囲まれてでもいたかのような頑迷さが見出される。

ドイツ、イタリア、あるいは日本から我々のもとに届く声明文においては、その全てに「拡大」の修辞法が用いられており、その趣旨はみな同じである。世界の資源はあまりに長い間、海洋国家によって自分勝手に囲い込まれてきた。地球の（とりわけかなりの遠隔地や裏側の）富は、船舶によってしかある場所から別の場所へと輸送するほかなく、そして銃火器によって武装された船舶を用いてしか警護できないため、持たざる側の国家には手が出せないはずのものである。それらの国家は爆弾と砲弾を用いて何とかしてその富への突破口を開くことだろう。主に論じられてきたのは以上のようなことである。そして、それを成し遂げるためには、海の優位性という概念そのものが執拗に攻撃されねばならず、その具体的な存続は廃絶されねばならない。

当然のことながら、こうした綱領のもとで開始された今回のような闘争は、その自由な存続がシーパ

ワーに依存している方の国家が、交戦中かどうかにかかわらず、居心地悪く感じるということを引き起こすより以外の結末を持ちようがない。そしてそれが実際に起こったことなのである。それはほとんど大洋そのもの――それを横切ることでイングランドが糧を得、そしてそれに包み込まれていることでアメリカ合衆国市民たちがあれほどの安心感と居心地のよさを得ている大洋そのもの――が脅かされているかのようである。

第三章　普遍主義と国粋主義

現時点でみなが信じているように、我々は世界国家の創設でもって頂点に達することとなる劇の序幕を目の当たりにしている。このたびの戦争ではそれほど充分かつ決定的な終幕を迎えることはなかろう。とはいえ現在の第三帝国との闘いは、少なくとも上記のようにして地球上の生活が数多くの政治組織に取って代わる一つ政治組織へと何らかのかたちで統合される序曲となるだろうというのは我々みなが感じていることである。

しかし世界国家は「普遍主義」政策とでも呼ぶべきものを伴うことだろう。これにより「普遍主義」は暫定的かつ実験的な段階を終えてパワーの統合体へと変化を遂げたことになる。そして、これらのことを全て考慮するなら、何であれ普遍主義への傾向というだけでも現時点で特別な重要性を持つ。

普遍主義への傾向の対立物が国粋主義への傾向である。そしてもちろんこれこそが、ドイツのプロパガンダ機械が英国のシーパワーに汚名を着せようと「普遍主義」という言葉を選んだことが奇妙なほど適切であり、しばし詳しく論じるに値した理由である。まさにこのアングロサクソン人に見られる――そのシーパワーは全くさておいて――普遍主義的な傾向こそが、ドイツ人にとってはアングロサクソン人のことを理解しづらくさせているもの、あるいは理解したときでさえドイツ人をしてこの普遍主義的な精神を備えたアングロサクソン人が自分の本性上の敵だと感じさせるものである。そして、この世界主義的な考え方、あるいは濫用され気味ではあるが言葉の最良の意味における国際主義的な考え方は、イギリス人をして、そしてまた異なった仕方でアメリカ人をして、ドイツの好戦主義を狂信的なくらいにまで毛嫌いさせるものなのである。

我々が論じている普遍主義への傾向について言えば、シーパワーだけがそうした傾向を目に見えて誇示している訳では全くない。ある点では、シーパワーは最も非力で、あるいはそれ自体では最も簡明さと完成度に乏しいとも言える。他にも最上級の重要性を持ったいくつかの傾向が存在している。

アングロサクソンのシーパワーがこの普遍主義的な性格を持っているのは第一に物理的な理由による。つまりこのシーパワーは広範囲に及んでいて遍在的なのである。しかし宗教ならびに人種もまた、これと同じ普遍主義的な――この世界主義的ないし国際的な――傾向の実例を提供してくれる。

別の機会に、『ヒトラー信仰とその終焉』(5) において、私はいかにしてヒトラー氏が、普遍主義的な複合体をなしている三つの勢力に挑みかかりつつあり、少なくともその二つについては自身の力量を超えて対決しようとしているのかを指摘したことがある。その三つの勢力とは、(1)アングロサクソン人、(2)ユダヤ人、(3)カトリック教会、である。

マキャベリズムを踏襲する政治家にとって、これは首を傾げたくなるほど不器用なことであった。政治家の名に値しようとする者であれば、これほどの規模の愚行を犯そうなどとはしなかっただろう。しかしながらヒトラー氏は政治家ではない。彼は狂信者なのである。そして政治家と狂信者というのは互いに相容れない言葉である。おそらく彼の不気味なほどの力は、この事実――つまり彼は真っ当な意味での政治家では全くないという事実に由来するのである。

さきほど引き合いに出したこれらの普遍主義者たちを一つずつ取り上げてみよう。ユダヤ人はアングロサクソン人よりもさらに普遍主義的である。あらゆる土地で彼らが影響力のある地位にいるのが見出される。彼らは、アングロサクソン人と同様に、上海でもスワンシー(7) でも同じように身を落ち着けている。彼らは一つの世界勢力として一丸となって行動する。同じようにローマ・カトリック教会もその信徒、伝道師、施設を世界中に所有している。カトリック教徒は、おそらく第一義的にではないものの、とはいえ確固たる信念と目的意識を持って、ブエノスアイレスに住んでいようとボンベイに住んでいようと、国際的な共同体の一員として考え、行動する。もしローマ・カトリックの聖職者をバルセロナで殺害したなら、ローマ・カトリックはバビロンであろうとロングアイランドであろうと、あるいは英国連邦バーミンガムであろうと、同程度の圧力を及ぼしてくるだろう。同じように世界のどこであれユダヤ人のマイノリティを弾圧したなら、あまねく存在していて決して侮れない勢力であるイスラエル

全体を相手にせねばならなくなるだろう。

アングロサクソン人はこれほどの幸運な状況には置かれていない。というのも天津でならアングロサクソン人のズボンを脱がせて頬をひっぱたくことも可能であり、そしてこの大いなる海上移動的な共同体の憤激する一員の仇を討つという責務が彼のシーパワーに見合うものでなければ、この哀れなブリトン人はそうした辱めを耐え忍ばねばならず、それはなかったこととして忘れられてしまうからだ。それでもなおアングロサクソン人らを打ちのめすには相当の影響力を持つ必要がある。そして世界におけるアングロサクソン勢力は（海上におけるその遍在性のおかげで）軽々しく戦いを挑んでよいものではない。

とはいえもしあなたが、無鉄砲にも――先に述べたように――ユダヤ人を打ちすえ、絶えず（水曜日、すなわちウォーディンの日に自らの木のような名前を提供した神）ウォーディンのことを話題にしてカトリック教会を敵に回し(6)、アングロサクソン人を侮辱するのを同時に行なうほどの無鉄砲なら（そこに含まれる残虐行為は全く度外視して）、結局のところあなたは間違いなく気が触れているに違いない。

ヒトラー氏は、もし狂人でないならば、疑いようもなく極端に偏狭な精神の持ち主であり、ドイツ国外の反応をまるで見積もれていない。彼は、自分が水も通さぬほど堅牢な国粋主義的国家ではなく宇宙（universe）に住まっているという事実にすら気がつかないほどの絶望的な非普遍主義者なのである。

ここでもまた残虐行為を別にすれば――この問題からこのようにして残虐行為を取り去ることが可能ならば――、迫害されることに生きがいを感じ、弾圧者たちを打ち負かしてきた人々であるユダヤ人に宣戦布告するというのも、政治手腕と見ることも可能な一連の行動であったかもしれない。確かによい考えではなく、愚かな精神が透かし見えているものの、政治的には不可能ではない。あるいはローマ・カトリック教会を攻撃するというのは、同等に犯罪的で無分別な行為だが、武力外交の観点からすれば実行可能な考えであったかもしれない。他の人々は、現世の間は失墜や敗北を経験することなしに、「旧教」を攻撃し簒奪してきた。イングランドのヘンリー八世はそうした行ないをしても政治的には免責された明白な実例である(8)。そしてアングロサクソンに関して言えば、彼らは最初に世界勢力になったがゆえに多くの人々によって攻撃されてきた。そうした攻撃はこれまで成功することはなかったが、いつの日かアングロサクソンの方が打ち負かされないとは言えない。それは政治的には、精神病院の外にいる者であっても空想してみるかもしれない考えであろう。

そうすると、ヒトラー氏はこれら三つの国際的な勢力の内の二つを鬱陶しがらせつつ、三つ目の勢力を無理矢理に味方につけることもできた。あるいは短い間だけ極度に一つの勢力に煩わしい思いをさせ、自らを追い払うために金を出させるということもできた。彼は何らかの自分に有利なハッタリの構図を、そのハッタリが有効であり続け、複数の対抗勢力同士を拮抗させて漁夫の利を得られるように細工できる限りは、楽しむということもできた。しかし厳粛かつ重々しくも、そうした三つの敵対者をひどく怒らせることに没頭したというのは、途方もない無邪気さの世界新記録であった。そうした振る舞いによってヒトラー氏はドイツの人民に対して自殺命令を下したのである。

ところで、ここまでで「普遍主義的」という言葉は――この小冊子の前半における「絶対主義的」という言葉と同様に――読者にとって耳慣れたものとなり、また完全に読者の理解するところとなったものと思う。ときに普遍主義者たちは、必然的にではないとはいえ、競合する。しかしこの［普遍主義的という］言葉で形容される人々からなる主要集団の三つともに対して、それも同時に、［ヒトラー氏が］攻撃を仕掛けたというのは、究極的には重大事件というだけでなく最も幸運な出来事でもあったことが明らかになることだろう。

まさに――普遍性という――概念そのものが誹謗と中傷の対象となるときには、確実に希望の兆しが現れ始める。あるいは少なくとも、戦争と呼ばれる殺意に満ちた暴発からの救済は、偏狭な国粋主義的方向よりはむしろ普遍的、国際的な方向に探し求められるはずだと感じている私のような者にとっては、誰であろうと希望の兆しが現れているように見えるだろう。戦争は、我々がそれを終わらせる手立てを考え出さない限りは、人間社会全体を決定的に粉砕してしまう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ここまでの数章の表向きの主題である海軍力（シーパワー）とは、普遍主義の極めて部分的で不完全な類型である。それはたんに武力外交の分野で現れる政治的かつ軍事的な現象である。真に普遍的な統治、つまり――

ドイツや日本、あるいは他の何らかの強情な国粋主義的少数派にとってだけというよりは――万人にとっての「一つの民族、一つの国家（ein Volk, ein Stat)」が樹立した暁には、言うまでもなくシーパワーは一日たりとも存続することはなかろう。

というのも、どんな国家であれ人類の一部として見たなら少数派だからである。そして我々は神その方より以外には地球全体の総統や指導者といったものはおよそ何一つ想像できない。

我々はすでに十分な数の大言壮語する小男たち――お腹いっぱいになるほどの近代のカエサル――を目の当たりにしてきた。私自身が言うべきことではないものの、このような時局に際して、このような実例を目の前にして、言わないでおく訳にはいかない。すなわち、現状を変えるために神を信じてみてはどうか。自らの神の代わりに政治のための宣伝省に赴くのではなく、なぜ総統の代わりにこの宇宙の壮大な建築家を戴こうとしないのか。神というのが十分には具体的でない――あまりに抽象的だからか。そうであるなら、ますます粗悪になっていくカエサルたちの長い列があなたを待っているのを目の当たりにすることになるだろう。

第四章　普遍主義的な見取り図における人種と階級

本書のこの部分において「シーパワー」という副題とともに民主主義について何を学ぼうというのか。民主主義（とその政治的対照物であるファシズム）がこの研究の主題である。そしてシーパワーについての議論は、確かにシーパワーが今日の世界において無視できないだけに興味深いとはいえ、民主主義に新たな光を当てたというのでなければ場違いなものであろう。

さて、初めにかなり確実な等式がここにある。他のどんな二つのものより以上にファシズムと国粋主義は同一のものである。ファシストであるということは国粋主義者であるということなのだ。

現時点での国粋主義は総じて、多かれ少なかれファシズムの一形式と見なさねばならない。我々の時代でファシスト――あるいは一種のファシスト――でないような国粋主義者を想像するのは不可能であり、その逆もまた然りである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

国粋主義については多くのことを語った。しかし民主主義はどうだろうか。

現代の政治の専門用語（ジャーゴン）には「普遍主義」といった単語はない。「国際主義」というのがそれに最も近いだろう。しかし今日、この言葉は時代遅れで、極めて特殊で、むしろ疑わしい響きを持っている。

現在の政治学において、「普遍主義」といった用語は、ナチスによる論戦において英国という敵を貶めるのに用いられる以外には存在しない。とはいえそうした単語があったと仮定してみよう。そうした単語がすでに流通していて、国粋主義に対立するものとされてきたと仮定してみよう。そうすると、この二つの主義の間には間違いなく死闘が繰り広げられよう。この地球はこれら二つの主義の両方が併存するには狭過ぎるのだ。

以上で普遍主義について、国粋主義について、ファシズムについては十分である。しかし明らかに民主主義についてはまだ不十分である。民主主義は以下のようにしてこの見取り図の中に登場してくる。

民主主義の限定的な性質――「民主主義者であるということはアングロサクソン人だということだ」という声明がほとんど、完全にではないにせよ、いかにして真実なのかということ――はすでに強調しておいたとはいえ、民主主義的なアプローチは極めて寛容で包容力のあるアプローチである。加えて民主主義は、（国粋主義的な原則がそうであったようには）普遍主義との死闘に至るどころか、これと非常に相性が良い。

シーパワーが――その最も普遍主義的な形式においては――アングロサクソン流の民主主義の表現だからといって、平均的なアングロサクソン流の民主主義者が普遍主義者だということにはならない。どういう訳か平均的なアングロサクソン人はむしろ了見の狭い人物でさえあり、例えば［インドの］バラモンや［日本の］侍のような自分より肌の浅黒い人々を「土着民」であって極めて劣等だと見なす。

民主主義は真に国際的な心理状態、あるいはこの地球上の比較的ささいな事件全てに対する普遍主義的なアプローチを授けたりしない。しかし少なくともブリトン人は、これまで世界中を動き回ってきた結果として、外国人を見かけても身構えたり激昂したりはしない。彼は外国人を不愉快なもの、あるいは英国全土への侵入者というよりは、むしろ愉快なものと見なす。

まさにアングロサクソン流の民主主義こそが普遍主義への第一歩を踏み出したのである。結局のところアメリカ合衆国において最初に「［人種の］るつぼ」を用意し、これをかき回し、揺り動かしたのはアングロサクソン人だった。この「るつぼ」が我々の望

んだほどには素早く溶け合っていないとしても、それはアングロサクソン人のせいではない。

ニューヨーク市――それは世界随一のるつぼであり、そこではユダヤ人と結婚したアイルランド系女性が中国系の黄色い肌の娘さんたちを押し分け(9)、キューバ人がクロアチア人と親しく交わりながら生活し、そして多くのアフリカ人が一見するとるつぼの底の方に暗く他と混じり合わないまま横たわっている――の悲喜こもごものただなか、この巨大な溶解場（それは心を溶かすようなメロディーにまで溶解して、このプロセスを促進している）のただなかでは、注意深い観察者ならば折りに触れて骨張ったアングロサクソン人が、あたかも自身の手仕事を誇らしげに眺めているかのようにして、蒸気の中をあちこち移動して回っていることに気づくだろう。このアングロサクソン人は自分を自分のままに保っている。彼自身はそこに飛び込んで、何か抽象的で国際的なもの、何か普遍的なものに溶け込もうとはあまりしてこなかった。しかし彼は、このように国籍が混ざり合った光景と人間の血統を混ぜ合わせる怪物に対してドイツ人が感じるような、先祖に対する自責の念は経験したりしない。彼は完全に現状を好ましく感じているのである。

ファシズムはこうした人種の混合に我慢がならない。ファシズムのもとでは各々が生まれつきの偏見と相違点をそのまま保とうと、さらには強めようとすらする。そうしたことに民主主義は拘泥せず、人種の垣根が解消されるのを善意の眼差しで眺める。というのもどんな物事であれ民主主義がそれにアプローチする仕方の本質とは人間の自由への欲求だからである。そしてもしある人が誰であれ自分の望む相手と結婚できないなら、どこに自由があるというのか。もしメキシコの日雇い労働者がグレタ・ガルボに似た金髪の田舎娘との結婚を禁じられているなら、それは自由に対する侮辱である。法的な婚姻障壁を認めることは極めて非民主主義的なことであろう。それゆえアングロサクソン人はこうした差別のない婚姻を穏やかな目で眺めるのである。

ここまで我々は人種についてばかり話してきた。しかし、この普遍主義的な見取り図には人種と同様に階級も浮上してくることは決して忘れてはならない。有色人種の身に起こることはヴィクトリア女王時代のスノッブが「生まれの卑しい者」と呼んでいた人々の身にも起こる。

ある皇太子が洗濯屋の女中と結婚したいと心から願ってもそれが否定されるとしたら、それもやはり自由に対する侮辱ではないだろうか。そして、もっと頻繁に我々が見聞きする例を挙げてみるなら、もし小さな町の検事か医者の息子が有職の女性に想いを寄せているのに、その伴侶を持ちたいという本能を抑え込むよう強いられるとすれば、ここでもまた自由は無視されていて、敗北を喫したのである。

人種にとって存在しているのと同様のるつぼが、階級にとっては世界中のどこにも存在していないことに思いを馳せながらいささか居心地の悪い気分にならないのなら、真の民主主義者ではない。

ニューヨーク市においてさえ、金持ちの黒人(10)がアイルランド系の女性と、あるいは誇り高きアメリカ革命の娘(11)と結婚する方が、同じ人種に属する富裕層と貧困層――いわゆる「教養ある人々」と「無教養な人々」――の間で婚姻関係が結ばれるよりもずっと容易である。

アングロサクソン人は悪しき社会的スノッブである。つまりそのスノッブ根性が彼の民主主義にとって大きな障害となっているのだ。主にこれが理由で民主主義は汚染されてしまう。しかし民主主義には、英国流のスノッブ根性でさえ乗り越えて、我々の民主主義の伝統を今以上に普遍主義へと近づけてくれる何物かの萌芽が含まれている（その「デモ・クラシー」あるいは「人民による統治」という名前だけでもそれが事実であることを絶えず思い出させてくれる）。この戦争はこのような成果をもたらすのかもしれない。大局はこの方向へとシフトしつつあると言われている。

結論

控え目な分量の書籍には以下の利点がある。すなわち、おそらくそうした書籍は、少し座っている間に読み終えてしまえるので、最後まで読んでもらえるだろう。そして推理小説は別にして、とりわけ戦時下にあって、どれだけの人が少し座っている間以上の時間を著者に与えてくれるだろうか。

私はこのささやかな分量の中で全てのことをほんの数語で語ろうとはしなかったし、あるいは僅かばかりのことを混ぜ物を取り除くこともせずに語ったり、まるで普通の分量の書籍を著すかのごとく意気込んで語ったりもしなかった。

前者の［全てのことをほんの数語で語るという］方法には、村から村へと駆け足で通り過ぎていく平均的なドライバーの習慣につきものの欠点がある。これら小さな共同体の一つ一つを通り過ぎるのに要

する一分半程度では、誰もたいしたことは記憶できない。何十もの村を駆け抜けて行くよりも、一つの村に一日は留まった方が、その特定の地域についてずっと多くを知ることができる。

いずれにせよ、ここで我々は結末に近づきつつある。私にできたのは、おそらく、この時代の主要な諸問題――すなわち現下の「イデオロギーの」衝突において我々の観念とは正確なところ何なのか――にアプローチするための一つの方法を提案することである。いかなる観念とともに我々は戦っているのか。我々はこれらの観念を一貫した全体へと動員できるのか、そしてできるとすれば、その全体は何という名で呼びならわされるのか。それは「民主主義」だろうか。あるいは新しい名が発見されるべきなのだろうか。ある者は変化に好意的だろうし、またある者は民主主義に固執することを望むだろう。私にとっては後者の道筋の方が強く訴えかけてくる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ここで私は、理論家――あるいはしばしばそう呼ばれているように「夢想家」――のアプリオリ式の方法論は何としてでも避けるべきである、という確信から話を始めた。我々には取り組むべき一定の材料、すなわち人間という材料があって、実際のところこの限定だけでもかなり大きなものである。長くても（せいぜい二、三年しか）保っていられないような形状や態度へと、そして途方もない苦痛が伴う養子縁組へと無理矢理に人間を押し込めるよりもむしろ、実用的な方針を試してみる方が賢明であろう。すでに主張したように、我々は平均的な人間を天使や超人、あるいは「英雄」に変えられるなどと言い張るのを止めるべきなのだ。

この方法が採用されたなら、ヒトラー氏好みの大げさなスローガン、「国家を救おうとする者は英雄的に考えることを学ばねばならない」は、お払い箱になるだろう。英雄的な考え方などというものは存在すべきでない。そうした考え方は、大勢を殺し、傷つけ、破滅させるのであり、かくしてそれは、あらゆる叙事詩がそうであるように全く突然に結末を迎え、あとには歴史書における血みどろの一章の他には何一つ残すことがない。

第一次世界大戦におけるロイド・ジョージ[12]のスローガン、「英雄が住みやすくなるように世界を変えよう！」でさえ、同じ非難の対象となるだろう。そうした言い草は極めつけの苦々しさを後に残す。なぜなら、普通の人々は「英雄」ではないし、そうなることも望んでいないからだ。終わりのない労苦と損失を被りながら、実は存在しない神話的な人々からなる階級向けの世界を作り出すために招集されることなど彼らは望んでいない。彼らが好むのは、普通の人々向きの世界をとりあえず手に入れて、そこが過度に不快でなければそのまま暮らし続けることの方である。

しかし野心的な人々からなる小集団（政治家たち、時事評論家たち、あらゆる類いの怠惰な寄生虫たち）はいたるところにいて、権力に恋い焦がれている。彼らは平均的な人類が持つ退屈な合理的理念が自分たちに何ももたらさないことを知っている。かくして彼らはヒトラー氏のように「英雄的に考える」ようになる。彼らは「救世主」になるのだ。

そこに我々の本当の問題があり、それと比べれば他の問題など取るに足らないほどだ。どうすれば、これら高圧的な政治のセールスマンと騒々しい「救世主たち」からなる個人や集団を抑制できるのか。日常生活の澄んだせせらぎを嫌うこれらの「激流専門の」漁師たちは、そのトレードマークが鉤十字であれハンマーと鎌であれ、搾取することが前提の自身の「指導的立場」にとっては何の役にも立たない平和という大義を毛嫌いするものの、しかし我々の帰属先が大多数の「夢遊状態の」平均値であろうと芸術家であろうと、研究者であろうと何であろうと、その生産性が社会の落ち着いた状態に依存している限りは、まさに彼らこそ我々にとっての大問題なのである。

［他方で］いわば平和の専門家とでも言えるような人々がいて、そしてこのタイプの人々だけが「激流」には全く関与することがなく、むしろ我々の九十九パーセントが日々の生活を送っている澄んだせせらぎの方を好む。もちろんこれらの人々こそ《平和の君［イエス・キリストのこと］》、真の《救世主》の信奉者なのである。

このようなことはただの事実陳述だとして放っておかれるのかもしれない。もしあなたの望むのが平和であるなら、それをどこに探すべきかを知っておかねばならない。しかしもしその場所で平和を探すのでなければ致命傷は覚悟せねばならない。なぜなら残忍な英雄販売業者たちの売り物と言えば血と汗と涙しかないからである。もちろんチャーチル氏は、このフレーズを大いなる先見の明でもって作り出したことで、自身の最上級の正直さと詐欺への嫌悪を立証した[13]。つまり彼の苦痛に満ちた計画とは結局のところ対抗策に他ならなかった。このノアの洪

水を引き起こしたのはチャーチル氏ではない。狂人から身を守ろうと決意したのであれば、流血はやむを得ず、現実と向き合うのが最良の方策である。

政治について考える際には、ちょうど呼吸する空気だとか、食べ物や飲み物を我々が必要としているように、まさに前提として受け入れねばならないことがいくつか存在する。これこそここまでのページを通じて私が絶えず強調してきたことである。どんなに我々が望んだところで、我々はタブラ・ラサを身につけることはできない。我々は、政治的には、土台から何かを築き上げるということはできないのである。せいぜい我々にできるのは、無理のないように、順応可能なように変化させること、我々がこれは改良だと信じられる範囲で改良することだけである。

別のところで私は自分のことを「タブラ・ラサの男」と描写したことがある。私は急進的な気質の人間なのだ。生得的には、私はおそらくこれまで私が話してきた理論家たちの一人なのだ。しかし私は経験から以下のことを学んだ。すなわち、共同体、種族、国家は樹木のように成長する。その過去はその現在と同じくらい現実的であり、しばしば現在よりもはるかに現実的である。場当たり的に根本的な変化をそれに課すことは不可能である（今では「書記長」と呼ばれているとはいえ再び皇帝を召喚してしまったロシアの人々の振る舞いがその証拠である）。

イングランドにおける、あるいはアイルランドにおける政治は、常に特定の形態と色合いとテンポを備える。北米大陸の人々は、思うに、もっと柔軟で予見不可能である。しかし長い伝統のある社会では、最も急進的な改革者は、これと比べると何か非常に柔軟性に欠けるものを想定せねばならない。もし、どんな形状にでも唯々諾々と成形される無機質な粘土の塊を扱う彫刻家にでもなったつもりで振る舞おうとすれば、この改革者は多くの不愉快な驚きに見舞われることだろう。

国粋主義者の大言壮語は全く別にして、イギリス人はヨーロッパでも、最も文明化されているとは言えないとしても、最も生まれが良いと主張することもできる。そして彼らは多くの立派な特質を備えており、それはもっと文明化された人々にさえ所有できないものである。『北回帰線』のアメリカ人作家(14)はイギリス人が「気立ての良い犬のようだ」と述べている。よろしい、私は犬好きだ。これまで多くの国家をじっくり観察する機会を得れば得るほど、私はこの犬たちがいっそう好きになってきている。

とはいえイギリス人はかなり独特である。例えばパリとロンドンは、たった二、三百マイルしか離れていないにもかかわらず、ほとんど違う惑星上にあるとしてもおかしくないほど大きく異なっている。さらにテュートン人とスラヴ人もまた、相容れないくらいに異なっている。国家間の相違は完全に無視できるものではない。それはこれからも数百年にわたって残り続けるはずなのだ。それゆえ、あらゆる実践的な目的にとって、これらの相違は星々と同じくらい動かしようのないものでありうる。

ロンドンの巡査たちをフランスの警察官よろしく飾り立ててみても、誰もその変装に騙されたりはしないだろう。ちょうどジブラルタルにいるスペインの警官がロンドンの巡査のような格好をしたとしても、馬鹿げて風変わりに見えるようなものだ。とはいえこうした例をさらに募る必要もなかろう。

その存在を忘れていると突然にびっくりさせられる類いの事実がある。だとすれば我々はみな国粋主義を信奉すべきなのか。決してそうなってはならない。そうではなく、国民特有の性格という揺るぎない事実は、他の諸々の物事とともに、我々がそれを用いて作業すべき材料なのであって、それはちょうど、あるいはそれ以上に、我々が度を超えて理論的で尊大になってしまうと常に人間本性がやってきて我々の足元をすくうのと同様である。

あるがままに局限されてしまえば、この綱領には何ら押し付けがましいところはない。ただし過度に自惚れたり、あるいは現実的なイギリス人にアジアの神秘主義を、あるいは騒々しく遵法意識の低いアメリカ人に東洋の静観主義をあてがうような何かうまくいくはずがないことの成就に政治的に関与したりしない限りは。

さて、結論に進む前に、もう一度――アングロサクソン人の長編政治譚のことを思い起こさせる――「民主主義」という言葉について考えてみよう。それは単なる言葉に過ぎないが、人の名前と同じように、計り知れない重要性を備えている。それはほとんど国家の名前である。もし可能だとしたら、この「民主主義」という言葉を何か別の言葉に変える方が理に適っているのだろうか。それが問題である。

ドイツ人たちはヨーロッパに新しい秩序を樹立し、これにヨーロッパを従属させようと提案している。つまりそれによって彼らが言わんとしているのはただ、ドイツ風の帝国主義を英国風の帝国主義の代わりに据えようという提案に過ぎない。それは退屈な計画である――少なくとも非ドイツ人にとって

は極度に面白くない計画である。

フランス革命が万国の一般人をして、自分の主人にさえ近づけるかもしれない、あるいは自分の取り分を増やしてくれるかもしれないという希望とともに高揚させたように、この計画にもフランス人、ポーランド人、さらにはイタリア人でさえ高揚させるようなものがあるだろうか。ただ主人が変わるというだけではそれほどわくわくする経験とは言えない。

その「新秩序」としての弱点は、このドイツからの提案が（他国における親テュートン的な軍閥を別にすれば）他の人々にとって完全に魅力に欠けているという点にある。その味気ないエゴイズムが弱点なのである。我々はドイツの敵としてこの弱点を最大限に利用せねばならない。

その一方で、我々が他の人々を支配しているのをただ延長するだけという展望、つまり我々がこれまでどおりのことをただやろうとすること、言い換えればそれはドイツ人が我々に代わってやりたがっていること、のどこに他の人々にとっての魅力があるのか。残念ながら何もない、と我々は認めねばならない。そのまま放って置いたなら、我々と第三帝国は不思議なくらい面白みのない退屈なペアになることだろう。というのも、たとえ我々がテュートン人たちより百倍も気立ての良い帝国主義者だとしても、「帝国臣民」以外の人々全てにとって帝国主義はうんざりするものだからである。

大勢が感じてきたことだが、水で薄められることで民主主義の様相を帯びた共産主義のような、何か魅力的なものを我々は試し、考え出してみるべきだ。そうすることによって我々は、ちょうど一世紀半前にフランス人が行なったように、相応の賃金を得られず不安を抱いている万国の人々から構成された大衆の興味と共感を獲得するはずである。

ロシアの共産主義者たちにはそれができなかった。なぜならヨーロッパにおいて最も「恵まれない」国でさえ、ボリシェヴィキの生来の狂信主義と国民特有の無作法さには、ほとんど心動かされなかったからである。他方でもし我々、アングロサクソン人――この惑星上で最もこざっぱりして最も身だしなみがよく、最も尊敬に値する人々――が、無菌処理され、よい香りがして、ヨーロッパ人向きの共産主義をもたらしたなら、それは他国にも自然と魅力的に見えることだろう。以上が重要な論点である。

さて、多くの人々が民主主義について語る際、彼らが言わんとしているのは、実のところ上記の計画に含まれているようなことである。そして事実、アングロサクソン流の民主主義は――柔軟性に富んでいて、アングロサクソン流の天性が権威主義的な方向よりもむしろ自由至上主義的な方向に存することは分かっているがゆえに――、このような外からのプロパガンダを伴う綱領にもうまく適応することだろう。

とはいえそれが「民主主義」と呼ばれることはありえなかった。しばしば「民主主義」は人民のことをうやむやにするのが常だったのだ。人々が絶えず求めていたのは、そうした数多くの「ブルジョワ」関係とは無縁の何かである。そこではいつもこの関係が大きな難題となっていた。

しかしながら、現下の戦争が我々からあらゆる「ブルジョワ趣味」を駆逐することはあまりに明白であるから、我々は自分たちが「生みの親」であるところの言葉――すなわち議会制民主主義――に固執すべきだと私には思える。それを変えてしまうというのは自分の名前を変えることにも相当するのだから、できるだけ変えるべきではない。アングロサクソン人が今まさにすべきこと――そしてこの実践的な本はこの《今まさに》のために書かれたのだが――、それはこの「民主主義者」という古臭い言葉の中に自分が得てきたもの全てを盛り込んだ上で、他の人々にそれを取捨選択してもらう、ということより他にない。彼らに対して「民主主義者」の半分程度でも良いものを与える者は決して現れないだろう。もし彼らがこのようには考えないほど愚かなら、もう我々にできることは何もない。アングロサクソン人はやるべきことはやった。そしてアングロサクソン気質こそが実際に実効性ある国際連盟（League of Nations）なのである。我々の議会、すなわち我々の寄り合いは正常に機能している。すでに我々がしているようにして盟約を結ぶことで、我々はこの世界で間違いなく最強の政治権力をなしている。他の者たちがそうなりたいと思うなら、彼らを我々の仲間に入れてやろう。それこそが我々の取るべき態度だと私は提言したい。

訳註

(1) アルフレッド・セイヤー・マハン（Alfred Thayer Mahan, 1840-1914）は、アメリカ海軍の軍人であり、海洋戦略や海戦術に関する研究者、地政学の先駆として有名。

(2) 原語は「Mare Nostrum」。古代ローマで地中海を意味していたラテン語だが、このあとの文脈を考慮して直訳も記した。

(3) 1940年に英国艦隊がイタリア艦隊をカラブリア半島（イタリア半島の爪先部分）沖で会戦して以降、次第に英国艦隊が優位になっていった経緯を指すか？

(4) ドイツのエルベ川以東の土地貴族を出自とする資本家層のこと。プロイセンの絶対王政を支え、ドイツ帝国時代も高級官僚や商工の地位を独占した後、第一次世界大戦後に一時その勢力を衰退させたが、ナチス政権の興隆とともに保守勢力として復活した。

(5) ルイスの1939年の著作『The Hitler-Cult and How It Will End』(London: J. M. Dent & Sons Ltd）のこと。

(6) ラテン系の言語では水曜日はマーキュリーの日と呼ばれるが、英語では「Wednesday」と、つまりアングロサクソン人が信仰していた北欧系の神ウォーディン（Wodin）の日（Wodin's-day）と呼ばれることに言及しつつ、さらにこのウォーデンが「Woden」とも綴られるのを「木のような（wooden)」という形容詞と結びつけた洒落。

(7) 南ウェールズの都市。

(8) イギリス国王ヘンリー八世（Henry the Eighth, 1491-1547）は、六度の結婚とイングランド国教会をローマ・カトリック教会から分離してローマから破門されたことよって知られる。

(9) アイルランドのカトリック教徒の娘と若いユダヤ人が家族の反対を押し切って結婚する様子を描いた1928年公開の人気コメディー映画『Abie's Irish Rose』のことを示唆している。

(10) 原語は「Negro」で現在では差別用語となっているものの、当時のニュアンスを再現するため差別的意味を減じて訳出した。

(10) 原語は「proud Daughter of the Revolution」。1890年に結成されたアメリカ合衆国独立戦争当時の精神を継承しようとする女性団体、「the Daughters of American Revolution」のことを示唆しているか。

(12) ロイド・ジョージ（1st Earl Lloyd-George of Dwyfor, 1863-1945）は英国の政治家であり、1916年から22年にかけて首相を務めた。連立政権下で経済問題とアイルランド問題に苦しめられた。1922年に保守党が支持を撤回したのに合わせて首相を辞任した。

(13) 直前の「残忍な英雄販売業者たちの売り物と言えば血と汗と涙しかない（the barbaric hero-merchants have nothing to offer you but blood and sweat and tears)」は、チャーチルが1940年5月13日に首相に就任してから最初の演説で述べた「私が提供できるのは血と労苦と涙と汗以外にはない（I have nothing to offer but blood, toil, tears and sweat)」を示唆している。

(14)『北回帰線（the Tropic of Cancer)』(1934年）の作者、ヘンリー・ミラー（Henry Miller, 1891-1980）のこと。

※本稿の翻訳作業を含めたウィダム・ルイスに関する研究は、日本学術振興会の科学研究費助成事業に基盤研究(C)「ウィンダム・ルイスのメディア論――アートとイデオロギーの交錯」(課題番号：19K00137）の助成を受けている。